

## 五、愛憎の彼岸

愛憎の愛によって愛せられんことをのみ求める者は、愛憎の憎によっていつも真つ暗にされる。

愛憎の愛によって愛する者は、愛憎の憎によって人を憎む。

愛も迷いであり、憎もまた迷妄である。

愛憎のみによって終始する者は常に、自分のつごうのいい者を善人と言う。

愛憎を今一度見かえすものが、慈悲であり、智慧である。

親鸞聖人の生活はそこに樹てられてあつた。念仏の中に。

肉親の愛も、愛憎の愛である。したがって今一度見かえされなくてはならない。

兄弟であるがゆえに愛するのは容易である。しかし愛憎を越えねば真の兄弟愛にはならない。

夫婦愛は、愛の中の愛である。それだけ、憎悪もいちばん深く裏づけられてある。

それゆえに、夫婦愛こそ、高いものによって浄化せられなくてはならない。

もしそれがなければ、夫婦ほど醜いものはなくなる。

人生の、生活のと、口では容易に言われるが、愛憎を越えて生きる生き方一つでも、なかなか自分の上に実現することは困難である。愛憎を越えた気でいても、それはただ無関心になつたことであつたり、慣れて鉄面皮になつてしまつたのであつたりする。

愛する者を愛することはもやすい。

憎む者を悪む心を懺悔することは、とてもとても容易ではない。

愛憎を越えた生き方は、終始一貫した生き方である。

雨の日も風の日も、自己本然の相に生きることである。

悪人は、悪んでやるのが本当である気がしたり、悪人には悪まれるのが本当だと思ふ。だが悪人ほど、不純と純情とを見別ける天才はいない。彼は素肌を好む。

悪人に頭をたれさせる生活、それが、真の生活者の相であつた。それはいちばん容易なことであるのだが、凡夫にはできない。

悪に対するに悪の相をもつてする。世間は、初めに手出しした方を悪いと言ひ、その反対に賛成して、そして正義と言う。

われらの上には、それは許されない。

汝が何であつたかは、悪むべき人とともにおいた時、いちばんよくわかる。

自然発生的に、会った時から好きだったということは、人格生活に関係はない。再認識の天地において、ほんとうの愛の愛を成就しなくてはならない。私はそれを心掛けている。

愛憎による愛は、それを受けて必ず傷つき、これを与えて必ず他を傷つける。愛憎を越えたる信は、必ず自他ともに誠に生かす。たとい一時はいかにとられようとも。

聖徳太子のたまわく

「信は是れ義の本なり。事毎に信あれ。其れ善きも悪しきも、成るも破るるも、要ず信にあり、群臣共に信あるときは、何事かならざらん。群臣信無ければ万の事悉に敗る。」

万世の父、聖徳皇は、この信を生きたまえるか。

愛、一度極まつて、憎に変わるや、戦い、反逆、復讐と出るか、しからずば、不平、悲観、逃避と逃げるかである。

生活実践において、一生涯、愛憎の二路よりほかにない者には、眞実人生のよろこびはわからない。

愛憎のみに生きる者は、多くの悪人を造る。

愛憎を越えて生きる者は、人の中より純情を引出す。

造られたる悪人、引出されたる善人、汝の上にかえりくる。因果は厳然としてそこに保たれる。

なんらの文化的道義的宗教的教養なしに、憎悪に拍車をかけさせての運動は、一時はいかに進展しても、必ず没落する。

愛憎を越えての眞実に根ざした自然の力……それは如来の大悲の願力……に乗托した信の動きのみが、人類の眞の力であり、光である。

聖徳太子の「和をもつて貴しとなす。」との大和の理想が、それではあるまいか。

大和民族の指導原理は、それしかないと信ずる。

科学は無視されてはならない。それとともに、人類の良心に聖火を燃やすことを忘れてはならない。

一切の科学も文明も、人類の眞実愛の手に使わるべきである。

毒瓦斯ほど不幸なものを、かつて人類が考え出したことがあるか。

かつての仏教徒は、如来の慈悲を、如来の慈悲と抽象し、固定化した。そしてそれを自分の欲楽の満足のために使ってきた。そのために、静かに自分一人が喜んでいくらいで——じつはそれすらなくなつて——これを熱と血と涙とをもつて、人類のものとしようとするほどの熱情を失つた。

だが、社会的に働く人、必ずしも真実愛の人ではない。兄弟や隣人の病気をほっておいて、慈善音楽会の幹部になるような悲惨があつてはならない。それと似たようなことはいくらかでもある。

天下に号令するような立場の人が、不正を暴露するのは、個人の成就を忘れて、外ばかり見ているからだ。真実愛よりも、名をあせるからだ。人間は時に、兄弟のために使う一円の金よりも、他人のために使う十円の金が大儀でない人がある。とくにそれが、正義とか、人格とかの名義で名誉を買い得る場合に。

褒めてもらえねば明るい心で良心も物も捧げ得ないのは、真実愛を尊ばないで、それで名誉か愛かを買ひ受けようという凡夫のあさましい心ゆえである。

愛憎の彼岸とは、浄土であり、如来である。平等なる慈悲の領域である。静かに如来の願意を聞くべきである。大慈悲がわかる天地でのみ、醜き愛憎の心が見出せる。

だが大地は、人間愛によつて生かされる所でもある。彼岸の慈悲を信知しても、大地の差別を無視したのでは、二乗である。彼岸を無視して、差別愛だけにとらわれていれば凡夫である。

そこに第三の天地が生まるべきである。聖人の世界がそれではなかつたであろうか。

「念仏申すのみぞ末通りたる大慈悲」とのお言葉は、深く考えさせずにはおかない聖語ではある。